黙示録の記録

第 20 章

至福千年期

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

第２０章　至福千年期

黙示録２０章は、聖書の終末論に関する。相容れない様々な体系の闘争の場となってきました。この章の解釈こそが、黙示録全体、ひいては聖書の預言全体の解釈を決めると思われます。サタンが縛られ、世界がキリストと創造主に就く民の義によって支配される千年の期間に関しての記録がこの章です。

しかし、この記録をどの程度文字通りにとったらよいかが問題です。この千年期は正確に１０００年なのか、または、その数は単に象徴的数なのか。この期間サタンは文字通り牢に閉じ込められ力を失うのか、または福音の解き放つ力によって相対的にサタンが縛られるだけなのか。そうでなければ、キリストが文字通りの王座についてまさに地を治められるのか。それとも教会の働きと福音の宣教を通して、最終的に義の住む世界に変えられることに関する比喩（言葉の言い回し）に過ぎないのか。

各々の体系内に又いくつかの理解の違いがありますが、終末論に対する主な三つのアプローチは次のようなものです。

（1）前千年王国説は、この聖書の記述を完全に逐語的に解釈する立場です。前千年王国説は、黙示録１９章に記されているようにキリストが栄光のうちに地球に帰って来て、続いて黄泉にあるサタンが文字通りに縛られ、キリストと地上に甦った聖徒による文字通りの千年間の支配が来ると教えています。

（2）後千年王国説は、部分的に文字通りの解説で、地上にキリスト者の義が支配する期間があると教えます。この教えによると、キリストの支配は、キリストの教会を通して霊的になされます。キリスト教会は、キリストの大宣教命令の下、福音と教えを全世界に伝える任務を負わされ、世界の人々をキリストに勝ち取るこの働きが、教会を通してなされるとの霊的教えです。キリストの地上への個人的帰還は千年期の終わりで、その時新しい地球が設置されます。

（3）無千年王国説は、完全に霊的解説で、千年期を教会時代と同じと見ます。キリストの王国はキリストの身代わりの死と甦りと昇天によってサタンが打ち負かされ縛られた時の地上に対する象徴的意味で、そして世界的な裁きのために教会時代の終わりに計画されたキリストの個人的帰還をもって確立されるとするのです。

この注解書に対する序文で指摘したように、われわれの判断で、ただ一つの適切な解釈は完全に文字通りの解説なのです。このことは前に定義したように当然の結果として前千年王国の立場となります。この解説を取る更なる理由は、特に、千年期そのものの中心的問題に関連しており、この章で次第に明らかとなるでしょう。

キリストの地球統治

２０章の話は１９章の話に直接続いていて、２０章は接続詞「そして（また）」で始まります。それは実際の出来事の継続した記録で、この章区分はほとんどの人に誤った印象を与えます。この強調点は、１９章と２０章のほとんどすべての節の初めに接続詞（ギリシャ語“ kai ”）が使用されていることで示されています。

黙示録２０章１節　また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下って来るのを見た。

この出来事は、明らかに集まった軍隊が滅亡してすぐ後に続いて起こります。あれはどの反逆者と彼らの指揮者が撃破されたにもかかわらず、征服し続けている創造主の小羊の意に反して、悪魔の軍勢だけが残っていました。彼らに対する判決は、すでに黄泉にいる反逆する人や堕ちた天使の霊に加えて、当分の間、黄泉に縛られることです。

黙示録９章ですでに記したように、堕落した天使のいろいろなグループが、地球の中心にある大きな洞窟にある区画に昔からずっと閉じ込められていました。しかし、なお彼らの主人の命令を行う自由を持つ悪霊の軍勢があり、彼らは、特に患難期の間活発に働いていました。彼らは深淵（ルカの福音書８章３１節では「底知れぬところ」と訳されている）に投げ込まれることを長い間恐れていましたが、遂に彼らもハデスにいる仲間に加わる

時が来たのです（マタイ８章２９節）。サタンを縛る行為には、これらサタンの配下にあるすべての軍勢を同様に閉じ込めることが必然的に必要であり、そのことを裏付けているのです。

この使命を達成する天使は底知れぬ穴を開く鍵を持っている天使であるということを除いて、ヨハネにはどの天使かを判別できません。その天使はその形（黙示録８章３，１０章１節）から推して、キリスト御自身である可能性があります。キリストはハデスの鍵を持つ唯一の方（黙示録１章１８節）であり、キリストがサタンを素早く個人的にそこに直接処置するのは相応しいはずです。一方、キリストは少なくとも他の天使に一度だけ鍵を与えた場合があり（黙示録９章１節）、この際、前後関係に続いて出てくる**「馬に乗った方」**（黙示録１９章２１節）と**「天から下ってきた天使」**（黙示録２０章１節）に暗示されていて、二つの異なる人格に思われます。もし天使がキリストでないならば、おそらく偉大な天使ミカエルかも知れません。彼は長い間サタンと特別な敵対関係にありました（ユダ９；黙示録１２章７節）。ミカエルと彼の配下の天使たちは悪魔とその配下の天使たちを患難期の中頃地に投げ落としました。ハデスにさらに、彼らの仲間を投げ込むのは妥当な行為のはずです。

底知れぬ穴に到る鍵に加えて、天使は手に大きな鎖を持っていました。それを用いて**「強い人を縛る」**（マルコ３章２７節）ためです。この鎖は明らかに物質で出来た鎖ではありません。なぜなら、霊は単なる鉄の鎖で拘束することは出来ないからです。その特性が何であろうと、その鎖は悪魔を千年の間ずっとハデスに拘束し続けるに十分な鎖なのです。

黙示録２０章２節　彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、

誰が縛られるかについて疑いの余地はありません。それは、キリストと創造主に付く民の迫害者・竜です（黙示録12章17節）。それはエバを誘惑した同じ古い蛇です（＝コリント11章3節）。それは悪魔（「訴える者」「そしる者」）、罪の創始者（＝ヨハネ3章8節）です。それはサタン（敵対者）で、あらゆる手段を用いてキリストの働きを滅ぼそうとの思いに囚われている邪悪な闇の王子です（マルコ一章13節）。彼は以前これら四つの名前すべてでその身元が確認されていた（黙示録12章9節）のです。彼はまたすべての天使のうち彼の反逆に従った三分の一の天使の指揮者としても認められていました。しかし、今や彼は遂に縛られたのです。

ここで、初めて「千年」と明瞭に述べられています。「千年」または「数千年」という言葉は新約聖書でしばしば用いられていますが、今まで象徴的意味で用いられたことは一度もありません。それは時には正確な数より単に大きな数であることを伝える目的で不確かな方法で用いられますが、無千年王国的見解で要求しているのは、このような比喩的意味ではないのです。もし無千年王国の立場での解釈に従うなら（すなわち、千年期が教会時代に当たるなら）、「千年」はほぼ実際には二千年になるのです。

さらに、この期間を黙示録20章2～7節で、6回「千年」と記しているからです。サタンが縛られキリストと聖徒が暦年の千年の間地球を支配することを、ヨハネ（と聖霊）が私たちに可能な限り断固としてかつ率直に知ってほしいと主張しているかのようです。

さらに、サタンの「束縛」は、無千年王国の立場と一致させることは難しい。なぜなら、キリスト教の二千年、サタンは以前のすべての時代よりもより活発に聖書の言葉の宣教と創造主の民が勇気づけられたり霊的に成長したりするのを妨げ反対しようとして、しばしば成功しているからです。**「そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠を受けるのです。」**（ペテロ5章8節）。この警告は確かにサ

タンが現在のところ縛られているとか力を失っていることを示唆していないのです。「悪魔の策略に対して立ち向かう」ために私たちは絶えず「格闘」しなければならないのです。

黙示録20章3節　底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。

地球の中心深くのどこかに底知れぬ穴があり、その最も深く奥まったところに刑務所の独房が特別な囚人のために確保されています。この中心にある空洞をギリシャ語では“abussos”で、文字通りには「深さのない」または「底のない」の意味です。最近の翻訳ではそれを「深淵」と呼んでいます。しかし、「底知れぬ所」はもっと精細に引き出した言葉です。地球のまさに真ん中に位置し、何人もそれより深く入り込むことは出来なくて、すべての壁は天井からなっています。この様な場所がこの惑星で人から可能な限り遠いところに移されて千年期を通してサタンを閉じ込めるところとなるでしょう。サタンは偽りの父であり（ヨハネ8章44節）、全世界を惑わす（黙示録12章9節）者で、策略を千年の間完全に行えないようにされるのです（エペソ6章11節）。地球の中心に投げ込まれるだけでなく、独房に監禁されるのです。

彼は地球の中心に投げつけられるだけでなく、その入り口は取り除けないように封印された独房に監禁されます。それゆえ、彼はこのように監禁されている間自分に属する大勢の悪霊を導くことは出来ません。これらの大勢の悪霊はたぶん同じようにハデスか底知れぬところの各々にふさわしい区画に拘束されています。

これら大勢の悪霊は、失われた人々である男女の霊と同じようにそこで大いなる裁きの日を待っているのです。直径16キロメートルに過ぎない中心の空洞は、すべての堕落した天使と有史以来失われたすべての人の霊を容易に閉じ込めることが出来ます。このような空洞がこれまでに地質学者によって地表でなされた科学的測定によって発見され得るかどうかは疑わしいのですが、聖書がそこにあると言っているのです。

千年期の終わりに近く、サタンは最後に短い間解き放たれなくてはなりません。それは明らかに、千年期に生まれた人々がテストされなくてはならないからです。ついでながら、サタンの束縛は、カルバリーでサタンに打ち勝ったキリストの勝利によってサタンの力がある程度相対的に拘束されただけではないことを、はっきりと示すさらなる証拠なのです。十字架上で、主イエスは、確かに、すべての支配と権威（コロサイ2章14、15節）を奪い取ったのです。しかし、もしこれが悪魔を千年間縛る意味のすべてであるなら、サタンをその後すぐに解き放ったのはなぜでしょうか。カルバリーでの勝利がまた打ち破られるようになるのでしょうか。このような考えは非常にばかげたものです。

千年の間サタンが縛られている間、世界は最も強力な悪の源から解き放たれます。七年の患難期を通過したばかりで、それを通して受けた恐ろしい肉体的・精神的外傷は、人と悪霊の堕落による傷だけでなく生まれつきの異常による傷も清められるでしょう。こうして、キリストの偉大な千年王国の自然環境として適切に役立つ準備が整います。

激しい地震や地盤の隆起は罪深い世界の汚染されたすべての都市を水平にし、さらによいことは、千年期の初めに新しいきれいな平和な社会の設立を促します。これら陸地の大移動は世界の大きな山脈や島々をも取り除き、海洋の深みを埋めて、世界中どこもかしこも、ノアの大洪水による大激変による地盤隆起の前、

すなわちノアの大洪水以前にあったような、人が住める穏やかな地形と地理を世界中に回復します。預言者イザヤが予言して述べたように、**「すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。」**（イザヤ40章4節）

けれども、この洪水後の地形隆起を元に戻す激変が、再び全地を覆う水を齎すことはありません。なぜなら、たぶん洪水前の「大空の上の水」を回復して、海洋の水の多くは大気圏上空に再び上っているでしょう。患難期の前半の全世界的旱魃、ラッパの裁きの間、激変で、天体が地上に落ち、ついで鉢の裁きで激しく降り注ぐ太陽光線の強さの増加すべては大量の水蒸気を空の高いかなたに移すのに役立ちます。

恐らく、ものすごい地殻変動、噴火と地すべりは、新しく堆積している火山性堆積物の下に実に大量の水を取り込み、エルサレムの千年期の宮から流れ出る大きな川に給水する泉も含め、豊富な噴水井戸の誕生を促し、深淵にある原初の加圧された貯水槽をある程度回復します（エゼキエル47章1-12；ゼカリヤ14章8節）。

こうして、千年期の世界での海は原初の日々に見られたように、比較的狭く浅いことでしょう。さらに、水蒸気の天蓋の回復は、洪水前の地球全体の地上にあったような実に快適な暖かい気候をほぼ回復するでしょう。地球全体にわたる温室効果による一様な気象条件は、地域を越えて空気団が移動するのを妨げるので、もはや大きな大気の動きによる激しい嵐・ブリザード・ハリケーンや竜巻を生ずることはありません。

原初の世界にあっては、雨はただの穏やかな霧でした。局地からの日々の蒸散と沈降（創世記2章5節）は、世界中どこでも快適な温度と湿度を保ち、地球のすべての地域で豊富な動植物を支えます。もはや砂漠も大氷原も人の住めない高い山もありません。それはすべて**「はなはだ良かった」**（創世記1章31節）のです。ノアの洪水の大激変があの美しい世界を滅ぼしました。しかし、大患難期の地球規模の激変は少なくともある程度、

洪水前の環境を回復します。

たとえば、ヨエルの預言に注意して見ましょう。**「地よ。恐れるな。楽しみ喜べ。主が大いなることをされたからだ。野の獣たちよ。恐れるな。荒野の牧草はもえ出る。木はその実をみのらせ、いちじくの木と、ぶどうの木とは豊かにみのる。シオンの子らよ。あなたがたの創造主、主にあって、楽しみ喜べ。主は、あなたがたを義とするために、初めの雨を賜わり、大雨を降らせ、前のように、初めの雨と後の雨とを降らせてくださるからだ。」**（ヨエル2章21～23節；またホセア6章3；ゼカリヤ10章1節を見よ）

地球の地形の再区分と水蒸気の天蓋の回復は、すべてでなくても、まもなく荒地や砂漠の多くを取り去ることになります。**「荒野と砂漠は楽しみ、荒地は喜び、サフランのように花を咲かせる。・・・荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。焼けた地は沢となり潤いのない地は水のわく所となり、」**（イザヤ35章1～7節）とある通りです。（またイザヤ30章23節；32章15節；51章3節；エゼキエル34章26節；36章33～35節なども見て下さい。）

いずれかの方法で、地球の土地と水に大いなる癒しが来ます。ノアの大洪水前、土壌はあらゆる必要な栄養素に富んでおり、飲料水はすべて、地下深くにある貯水池から供給される自噴泉から出て来る純粋な新鮮な水でした。これらの深いところにある泉の破壊と大洪水後の荒廃した土地の浸蝕が、創造主の創造された原初の地球の生態系を大いに破壊し、土地は枯渇し、水は汚染されました。元来、人と同様すべての動物は植物性の食べ物だけで栄養を取ることになっていました（創世記1章29，30節）が、洪水後の遥かに厳しい環境の条件下で、創造主は人に動物の肉も食べてよいと認められました（創世記9章2～4節）。明らかに、同じ理由で、多くの動物も肉食になったに違いありません。

これらの状態は洪水後の長い年月を経てさらに悪化しました。土地の不毛化と水の汚染は進み、土地を肥

沃にする方法や汚染を取り除くための費用も増し加わらざるを得なくなってきました。患難期に外から加わった激変は、このような状況を最悪の状態にしました。荒廃がもたらした飢饉と地球の水が激減し有毒になったため海に住むすべての動物は死に絶えました。このような状態がもっと長く続くなら、地上のすべての生物はやがて生き続けることが出来なくなる流でしょう。

しかしながら、地球の土地と水の汚染をきれいにするため、あの恐ろしい浄化の期間に自然界の大激動を用います。地殻構造と火山活動による大変動と恐らく大気粒子の衝撃さえ、土壌に必要な栄養分と微量元素を新しく供給することになります。地上と海にある多くの動植物の死骸でさえハルマゲドンやその他のところで死んだ人や馬の何百万という骨格と共に、彼らの亡骸が遠く広く散らばされ土地を肥沃にするのに役立つのかもしれません。

先例のない地球全体の地震と噴火は広範な激しい地滑りと埃と岩が雨のように降り注ぐ引き金となります。そして、莫大な量の海水が大きな固まった物質からなる巨大な表土の下に閉じ込められ、海水は急速に加圧され石化し部分的に密封されたのです。

このことが少なくとも二つの重大な結果を最終的にもたらすと思われます。第一に、海の底は現在よりはるかに高い所に持ち上げられます。そして、その埋め合わせに、大空の天蓋の回復によって生じた大量の水の喪失と巨大な地すべりと岩なだれ（岩が降り注ぐ）の下に、ものすごい大量の水が地下に閉じ込められます。地殻はみな場所を変えたり、地球のマントルの上を速やかに動いたりして、多くの大陸プレートは、現在より相対的により大きな陸地となります。［マントル地質学で、地球の地殻と核との間にある地層で厚さ約２９００キロメートル（約１８００マイル）あると推定されている］

第2に、この地形の広範な再調整と大いに加圧された地下水のくぼみの形成は、流れ出る地球上の河川系の発展を容易にします。泉の水は加熱と濾過の過程によって浄化されます。**「わたしは、裸の丘に川を開き、平地に泉をわかせる。荒野を水のある沢とし、砂漠の地を水の源とする。」**（イザヤ41章18節）。

海洋の魚や他の海生生物の群れがどのようにして再び満たされるかは定かではありません。第二の鉢のさばき（黙示録16章3節）は**「海の中の命のあるもの」**すべての死をもたらします。したがって、少なくとも海の環境を必要とするこれらの魚はいわゆる食物連鎖から明らかに除外されていました。第三の鉢のさばきは同じように淡水に影響を与えていました。淡水生物を死なせるとの言及はありません（黙示録16章4節）。したがって、これら多くの生物は恐らく生き残り、彼らはその後の千年期の経済にとってより重要になるはずです。

エルサレムにある千年期の大きな川に関する記述に次のような面白い供述があります。例えば、**「この川が流れて行く所はどこででも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水がはいると、そこの水が良くなるからである。この川がはいる所では、すべてのものが生きる。」**（エゼキエル47章9節）。この川は新しい神殿から流れいで（エゼキエル47章1節）、源泉の岩床から得られる健康を与える鉱物質を十分に含んでいる可能性があるのです。また、ひょっとすると、それは神殿にある泉から発する川として人工的に清められ、ビタミン鉄分などを加えて栄養価が高められるかもしれません。そして、その時代の最も偉大な人々の蓄積された研究から得られた知識と資料が用いられます。彼らは今や贖われ恐らくキリスト御自身に教えられることでしょう。

前に推測して述べた筋書きは不完全で、多くの点で正しくないかもしれません。興味津々たるこれらの可能性に関するさらなる研究と調査は整然となされますが、最も大切な要点は、この疲弊し年老いた惑星を創

造主が何とかしてもう一度生き返らせ、地上に栄光に富むキリストの御国をもたらす準備を実現させることです。

これらすべてを実現させるために、この世の神、古い竜、サタンが地上に彼の極悪な影響を続けるのを完全に押さえなくてはなりません。サタンが縛られた後で、初めてサタンに侵害された統治を解放することが出来るからです。**「確かに、強い人の家に押し入って家財を略奪するには、まずその強い人を縛り上げなければなりません。そのあとでその家を略奪できるのです。」**（マルコ3章27節）。**「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神（創造主）の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」**（ロマ8章21節）。

黙示録20章4節　また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神（創造主）のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。

この章で、ヨハネは「また私は、・・・見た」（1，4，11，12節）と四回述べて、ヨハネは後に来るこれらのめざましい出来事の目撃者であったことを強調しています。ヨハネが獣と偽りの預言者が火の池に投げ込まれ、サタンは底知れぬ所に投げ込まれた直後、ヨハネは王として座に着く人を待っている非常に多くのずらりと並んだ王座を見ました。それから、ヨハネが見ていると、「彼ら」が王座に付き、統治し裁きをする権威が彼らに割り当てられた。

しかし、これら王者に相応しい裁き人は誰か、また彼らが裁くのは誰か。丁度前にある言葉によって、裁きをする正体としてただ一つの答えがあり得るのです。彼らは、婚宴の席だけでなく裁判官の着物としても相応しいまっ白なきよい麻布を着た同じ聖徒たちで、彼らはキリストが地上に帰ってきたときキリストに伴った軍勢を構成していました（黙示録19章8，14，19節）。キリストの血によって贖われ、墓から甦り、主のみ前に携挙されキリストの裁きの座で報酬を受けるに相応しいと評価されたすべての人々には明らかに一人ひとりに権威と裁きの座が割り当てられています。もし彼らがまったくどんな報酬にも値しないと思われてさえいなければ（Ⅰコリント3章11～15節）。

この驚くべき立場は、直接にまたはたとえで、聖書の多くのところで約束されています。**「あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。」**（Ⅰコリント6章2節）。**「いと高き方の聖徒たちのためにさばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。」**（ダニエル7章22節）。

12人の使徒たちには、すでに彼ら自身の特別な裁判権が割り当てられています。**「人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです」**（マタイ19章28節）。他の多くの権威は、ミナの譬え（ルカ19章11～27節）とタラントの譬え（マタイ25章14～30節）に従って。忠実さに比例して割り当てられます。

黙示録の導入に於いてさえ、聖徒のこの将来の役割は**「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また私たちを王とし、ご自分の父である創造主のために祭司としてくださった」**（黙示録1章5，6節；5章9，10節）とそれとなく示されています。さらに、このような権威は、すでに述べたように、「鉄の杖」の原則（黙示録2章26，27を見よ）に一致して、キリストご自身の直接の指示の下（黙示録19章15

節）に厳しく行なわれるはずです。事実、この審議中の節が、聖徒の統治はキリストと共になされると明らかに述べているように。

患難期の聖徒たちが、患難期のはじめに甦ったまたは携挙された人々の中にいないとはいえ、裁判権の割り当てで忘れられることはありません。事実、苦難を経験した独特の状況を考慮して、彼らは賞賛に値します。彼らは主イエス・キリストに対する忠実な証とかつて経験したこともないような最も厳しい困難な条件下で主の言葉の真理を保ち続けました。国々の政府によるキリスト教の公認または半公認の信教の自由は携挙後まもなく撤回され、敢えてキリストを受け入れる人はみなすぐに厳しい迫害に直面させられました。患難期の初期においてさえ多くのものは殺されました（黙示録6章9節）。それから、獣が患難期の中頃全権を掌握した時、キリスト信者の組織的皆殺しが世界政府の公的政策となりました。獣に対する礼拝と獣のしるしを受けるのを拒否した人たちは容赦なく狩出され死刑に処されました。

ヨハネは、今や信仰のゆえに死んだすべての人の「たましい」を見ました。丁度、患難期の初め頃、天にある祭壇の下にいる彼らの幾人かのたましいを見たように。患難期の最中に殉教の死を遂げた時、各自の魂は、しばし、天にある神殿に移されており、そこでこの瞬間を待ったのです。

遂に、今、彼らも栄光ある死者の復活に加わります。彼らは「生き返った」のです。この単純な宣言は彼らの受難すべてに対するこれ以上あり得ない最高のことばであり、キリストとそのことばを証した時に彼らが耐え忍んだすべてを補って余りあるものでした。彼らは「いつまで」と叫びましたが、今彼らの血の復讐はなされたのです（黙示録6章10節）。

彼らの「生き返った」との声明は、彼らの身体の復活のみを指し示せることばです。無千年王国論者は、

回心の時のたましいの復活に関するものとしてこの箇所を解釈しようとしますが、これは明らかにこじつけた解釈です。たましいは決して死にません、従って復活も有り得ないのです。これら殉教者のたましいは初めからずっと完全に生きており、知り、かつ話すことさえ出来たのですが、今、彼らの身体も「生き返った」、そこでキリストと共に治める事さえ出来るのです。このように、彼らのこの復活は、最初の実としてのキリストの復活に含まれます。順序として、第一にキリストの空中再臨前に死んだ人々の復活、（空中再臨時に携挙された人々を含む）そして最後に、キリストが空中に来られた時とキリストが遂に地上に帰られる時までの間に死んだ人々の復活です。

こうして、これら患難期の聖徒たちも適切な権威ある社会的地位を与えられ千年期の王座につき、そこで、千年の間キリストと共に地上を治めます。黙示録５章１０節に、天にある王座に集まった群衆は、この来るべき権利と責任を予知していました。彼らは、「私たちの創造主のために、この人々を王とし祭司とされました。彼らは地上を治めるのです」と歌っています。

キリストと聖徒の千年の統治に関するこの節の宣言的声明では、やがて来る将来の統治とその条件についての詳細は明らかではありません。しかしながら、旧新両訳聖書にこれらの情報はあらかじめ前もって与えられています。そこで、ヨハネはここで繰り返していないだけなのです。しかしながら、この期間の長さがどれくらいかについての実に大切な情報が、ここに最初に与えられています。あのわずかな情報が、ここで六回も出て来るのです。事実、この素晴らしい未来の「統治」はある人々よって「調停の王国」として知られ、千年続くのは確かに疑い得ないものです。

この時代は、マタイ２５章３１～４６節に書かれているように、明らかに民族の裁きとして知られる出来

事で始まります。その年代の前後関係は明らかに、患難期にすぐ続きます。**「だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、・・・そのとき、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」**（マタイ２４章２９，３０節）。それから、次の章で、この素晴らしいオリーブ山の説教の談話の部分が続きます。「２５章３１人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民〔または、異邦人で、この両者はギリシャ語では同じことば“ethnos”です〕が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、」（マタイ２５章３１，３２節）

黙示録の記事は、キリストが地上の王座に着く前に、キリストはすでにハルマゲドンに集まった軍隊を殺し、さらに患難期の殉教者を復活させたという情報をわれわれに与えています。こうして、地上に残されたのは、ハルマゲドンの軍隊にいなかったが、ただ獣に従った人々であり、もう一つのグループは、災害で滅ぼされなかった人々で、同時に、獣の刻印を受けるのを拒否している間に獣から遣わされた無刻印者狩りを何とかして逃げおおせた人々です。これらは明らかにそれぞれ山羊と羊に分けられます。

これらの人はみな天使によって地の果てからキリストのみ座の前に集められます（マタイ２４章３１節）。正確な数はわかりませんが、余り多くはないでしょう。**「見よ、主はこの地をむなしくし、これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、その民を散らされる。・・・それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。」**（イザヤ２４章１－６節）

患難期の生き残りの人々の裁きの基礎はうわべ上、法律を重んじているように思われるかもしれませんが、実際には、患難期の前後関係から見て、それは非常に現実的です。山羊として裁定された人々はこれら私の

兄弟たちの最も小さい者たちに対し、彼らが食べ物や飲み物や着る物に不足した時、または、間違いなく死刑執行を待って牢にいて苦しい生活をしていた時、援助を拒否した。彼らは助けるのを恐れたからか、または迫害者と意見が一致していたからかのいずれかの理由によるのです。両者の態度は、もし獣の手先が彼らの所に来たなら、獣の恐ろしい「しるし」を持っていたか持とうとしていたかのいずれかの人であることを特徴付けるのです。したがって、黙示録14章9～11節にある恐ろしい警告を考慮して、彼らは有罪と判定されなくてはなりません。確かに、彼らはハルマゲドンの同胞に似て、そのすぐあとに、彼らは殺され彼らのたましいは一時黄泉に送られます。窮極的に、これらの人は**「悪魔とその使いのために用意された永遠の火に」**（マタイ25章41節）入らなくてはなりません。

一方、「羊」は、情け深さと勇気を持ち合わせており、主の兄弟たちが迫害されている時、いのちがけで、助けの手を差し伸べた。もし、獣の使者が彼らのところに来たなら、このような人々は間違いなく獣のしるしをうけるのを拒否したはずです。こうして、創造主と聖書に対する彼らの信仰の態度を示したのです。それは、彼らが彼らの主として救い主としてキリストを受け入れた結果か、または、キリストの真の福音が彼らに知らされるや否や受け入れたかによるのです。

しかし、これらの人々にすぐに来る運命は、天に引き上げられることではなく、**「世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」**（マタイ25章34節）とある御国を継ぐ事です。もちろん、ヘブル書11章のカタログに載っている素晴らしい男女のように、このようなやさしい勇敢な業によって顕された彼らの素晴らしい信仰は、彼らが**「永遠のいのち」**（マタイ25章46節）に入ることを保証するのです。

主が話された「兄弟たち」は、ユダヤ人と異邦人の迫害された患難期の殉教者だけのはずです。**「イエスは言われた。『・・・わたしの兄弟たちとは、創造主のことばを聞いて行う人たちです。』」**（ルカ8章21節）。イエスはご自身の弟子たちを「わたしの兄弟たち」（マタイ12章49節・ヨハネ20章17節）と呼ばれたが、決して一民族としてのユダヤ人ではありません。予言的に、イエスは**「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」**（ヘブル2章12節）と言われた。

この時点で「山羊」は疑いもなく、ほとんど異邦人だけ（それゆえ「異邦人の裁き」）からなっています。イスラエルの民はキリストの栄光に満ちた地上来臨のとき民族全体として回心するという最後の結果を伴う、既に「ヤコブの悩みの日」を経験しているからです（ゼカリヤ12章10節；13章1；ロマ11章26節）。また、贖われたユダヤ人はこの時点でもちろん「御国を継ぐ」のです。こうして、彼らの父祖に対して創造主がなされたすべての約束の成就を喜ぶ準備が整い、千年期にはいるのです。

イスラエル人を長として各民族から、彼らの荒廃した国を再建するため残存者が来ます。たとえ各民族の最初の人口は少なくても、必要条件と刺激が大家族を奨励するし、人口は急速に増えます。さらに、洪水前の長寿が回復します。**「そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。」**（イザヤ65章20節）。このことは部分的に洪水前の気象条件と農耕条件が回復されること、また部分的に千年期の科学者たちによる工業技術の新しい発展によっても成し遂げられる可能性があります。事実、科学的工業技術の研究はかってなかったほど盛んになり、人間はかつてなかったほどに探求し「地を従わせよ」（創世記1章28節）との原初の命令を果たします。

もちろん、イスラエルは千年王国時代を通して世界で最も重要な国になります。**「多くの異邦の民が来て言**

う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。（ミカ4章2節）

他の諸民族がイスラエルを敬い、そこを彼らの礼拝の中心にすることを期待します。**「エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。地上の諸氏族のうち、万軍の主である王を礼拝しにエルサレムへ上って来ない氏族の上には、雨が降らない。」**（ゼカリヤ14章16，17節）。エゼキエル40～46章に書かれてあるような素晴らしい宮がエルサレムに建立され、聖職者の序列と犠牲になる動物のささげ物の伴った、古代の礼拝様式がまた開始されます。しかし、キリスト以前のイスラエルで行われていた単なる儀式ではありません。**「エルサレムとユダのすべてのなべは、万軍の主への聖なるものとなる。いけにえを捧げる者はみな来て、その中から取り、それで煮るようになる。」**（ゼカリヤ14章21節）

もちろん、**「キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえを捧げた」**（ヘブル10章12節）ので、このような動物の犠牲をキリストの死と復活後は行われない状態でした。福音による新しい律法の下では、キリストにある信仰を通して恵みによって救われるとの福音は、信仰の証拠としても信仰を助長するためにも動物の犠牲を必要としなかった。しかしながら、千年王国時代になると、状況が違ってくるのです。キリストを信じるのはたやすく、事実、信じないのはほとんど不可能です。人がキリストの側に立つなら嘲られ迫害を受けることは最早ありえないし、学校における進化論の教えで迷わされることも、または、公然と罪を犯す仲間に誘われることもないのです。

どのキリスト教の教義の立場ででも、救いは罪の身代わりにキリストが死んだことに基づいており、創造

主の恵みによってのみ提供されます。キリストの初臨の前には、彼らの罪の償いとして犠牲の動物をささげる事によって創造主が約束された罪の許しにおける彼らの信仰の証拠が与えられました。その場合、犠牲は信仰に対する有意義な助けとしてまた信仰の証として役立ちました。キリスト教時代にさえ**「行いのない信仰がむなしい」**（ヤコブ2章20節）が、新約聖書で確認され記録されているように、信仰は信じた人と完成されたキリストの業で行使されます。

千年期には、栄化されたキリストとキリストに在って復活し支配している聖徒たちが人として留まり、サタンとその軍勢は邪魔にならないところに置かれていて、キリストが創造主であることと聖書の真実性に関して知的に疑いを差し挟む余地は全くありません。それにもかかわらず、救いにはなおキリストに対するいよいよ多くの個人的信仰と献身が要求されます。このような信仰が本物かどうかは行いによって明らかに示されなくてはなりません。これが少なくとも動物の犠牲を再制定する理由の一部であるのはもっともです。キリストが己を卑しくされた日々に、キリストの栄光ある来臨を信ずるには強い信仰が要求されます。キリストの栄光の日々には、キリストが己を卑しくし死にまで従われたことを思い起こし信ずるのは困難ですが、それでも男も女もみな罪びとで彼らの罪のためにキリストが身代わりの死を遂げられたのであり、それを通してのみ救われ得ることを理解し信じることこそなお重要なのです。こうして、動物の犠牲はキリストの偉大なる救いのみ業の記念であり、思い出させるもので、信仰の助けとしても証拠としても役立ちます。

黙示録20章5節　そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。（それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。）これが第一の復活である

「ほかの死者」とは、もちろん、彼らの魂が黄泉に囚われ、救われていない人々に対する言及です。「生き返らなかった」というこの声明は、これらの節で語っている復活が、身体の甦りであることを極めて明白にさせています。千年期の終わりに、黄泉はこれらの霊を引き渡し、こうして彼らは再び身体が与えられ生きるのです（13節）。彼らの魂は決して一時も意識を失うことはありません（ルカ16章23節と共に黙示録6章9、10節を見よ）。したがって、「生き返る」という句は、身体という言葉以外には全く意味がないはずです。

救われない者の甦りは、「永遠の刑罰への甦り」であり、ヨハネ5章29節にある主イエス・キリストにより「いのちへの甦り」とは別の甦りとして区別されているのです。キリストは、また「義人の復活」は明白な出来事であったことを意味していました（ルカ14章14節）。ここで、明白に、第一の復活が第二の復活に千年くらい先んじることを示しています。

この患難期の殉教者のたましいの復活は、このように第一の復活を終わらせます。この節の最後の言葉「isである」はイタリック（KJV）で示さ、原本にはないことを示しています。この文の意味は、単に「これが第一の復活を終らせる」です。

ギリシャ語で「復活」という言葉は、“anastasis”で、文字通りには、「再び立っている」を意味します。新約聖書で40回用いられており、常に、最も自然にとって、死人の生き返りに対する言及です（ヨハネ11章24節；使徒4章33節）。このくだりを何かほかの大切なことを意味すると取る十分な証拠はありません。

「第一の復活」は、コリント第一の手紙15章20節から23節によると、最初で完結するのではなく、2回以上あるのです。死人の復活は、「眠ったものの初穂」として、キリスト御自身の復活で始まり、それに

続いて「多くの聖徒の身体」が「イエスの復活の後、墓から出てきた」ことによって示されています（マタイ27章52、53節）。次は、「キリストにある死者が甦る」時で，生きている聖徒がそれに伴って携挙される時が来ます（Ⅰテサロニケ4章16，17節）。患難期の中頃、二人の証人が立ち上がり（黙示録11章11節）、そしていまや、遂に、患難期の殉教者すべてが甦るのです。

黙示録20章6節　この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは創造主とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

第一の復活のどの段階で甦っても、彼の将来は祝された聖なるものとなることが保証されているのです。死の痛みを経験するかもしれませんが、彼は、栄光ある復活に与ってこれらはすべて忘れ去られ、彼は決して再び死ぬことはありません。**「第二の」復活で、救われていなかった人を待っている恐ろしい第二の死に関し、甦ったキリスト御自身以外何者も彼の身体に触れることはできません**（黙示録1章18節）。

他方、黙示録のこの第五の至福の表は、第二の死とは何かを示唆し、第一の復活にあずからないすべての人々に「権威」を持つのです。彼らの未来は、キリストとの交わりで経験する永遠の祝福と崇高さの未来ではなく、むしろ火の池における永遠の悲惨と悪化の未来となります。

聖徒は千年キリストと共に治めるだけでなくて、祭司となります（黙示録1章6節）。こうして、千年期の人々のために国家の政治と霊的教育の両方を指導管理します。キリストは、王の王であると同時にいと高き祭司

です。そして、甦った聖徒たちはみな、この現在の生涯での彼らの奉仕の忠実さに従って、千年期の間キリストの至高な命令の下、いろいろな宗教儀式と政治機能を行使するのです。

これら管理の詳細な様式と差異はやがて明らかになります。甦った聖徒たちは、この地上にではなく天に市民権を持っています（ピリピ3章20節）。そして、彼らはいやしくもキリストにより備えられた天にある「大邸宅」を与えられていたので（ヨハネ14章2，3節）、少なくとも、彼らの天にある都が千年期の終わりに新しくされた地球に天から下ってくるまでは（黙示録21章2節）、たぶん、彼らは決して再び地上に居住することはないでしょう。けれども、彼らは、彼らの地上での任務に関して定められた務をするためにおそらく適当な時、地上に現れるでしょう。例えば、甦ったキリストの使徒たちは、地上に王座を割り当てられ、そこでイスラエルの十二部族を裁くことが約束されています（ルカ22章28～30節）。また、甦ったダビデ王はイスラエルの全国民の上に君臨すると思われる（エゼキエル37章24，25節・エレミヤ30章9節・ホセア3章5節）。ある者は十の町の、ある者は五つの町の管轄権を割り当てられるでしょう（ルカ19章17，19節）。明らかに、聖徒には社会的または宗教的義務または両方の義務が割り当てられた権威の位階制度があるでしょう。

あらゆる時代の贖われたすべての人からなる大勢の甦った聖徒は、千年期の初めには、枯渇した地球の人口を数の点ではるかに勝り、「王と祭司」が「臣下」より多くなります。聖書はこの興味ある問題についての特別な情報をほとんど与えていないませんが、少なくとも考えられる多くの要因があります。まず第一に、すべての聖徒が報酬を受けるのではありません。多くの者は、**「損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして救われます」**（Ⅰコリント3章15節）。したがって、千年期に稔りある奉仕を持ち得たかもしれない機会は他の者に与えられます（ルカ19章24～26節）。こうして、携挙され栄化された聖徒たちの多くの者で

さえ、千年期の初めの数年、彼らを管理し指導する或る尺度を必要とするのかも知れません。彼らが肉体にあるうちに霊的知識と実践的な高い状態に達した人々は、少なくとも地上の人口がなお少ない初期にあっては「キリストにある幼児」として死んだ人々の教師として指導者として貢献できるのかも知れません。

さらに、彼らの務めは、あまりにも若く、いわゆる「責任年齢に達するまえ」に死んだ人々（多くの者は胎児でさえある）のすべてにとって、必要とされるのは尤もです。彼らは肉体的にも霊的にもなんとか成熟するまで成長させられなくてはなりません、そこで、より多くのさらによく完成した聖徒たちは、これらの人を訓練し教える仕事を割り当てられるのも尤もです。ことによると、主はこれら多くの特別な職務を天の都にいる信心深い救われた婦人に割り当てられるかも知れません。

これから来る栄光ある日々の千年期にどれだけ多くの甦った聖徒が天にいるかを正確に知る方法はありませんが、道理にかなった推測では約40億人位になるのかもしれません。これはおおよそ現在の世界人口に等しく、アダム以来、生を受けた人々すべての人数（おそらく、400億くらい）の約10％です。大多数の人々は救われない状態で死んだので（マタイ7章13，14節）、10％の数は少なくとも合理的と思われます。

数がどうあろうとも、甦った聖徒の数は千年期の初めの地球の人口より確かに多いはずです。しかしながら、すでに検討したように、人の多産と長寿に好ましい条件が回復されています。「地を満たせ」（創世記1章28節・9章1節）という創造主の原初の命令が本質的に成就され、人の数が「海辺の砂」（8節）のようになるまでにあまり多くの年月はかからないでしょう。その頃までには、すべての聖徒に実際に適当な挑戦状を提供するほど多くの人が地上にいることになるでしょう。これらの聖徒たちには、千年期の初めにこのような能力が備わっていた人々と千年期の始めに更なる訓練を受けなければならなかった人々がいます。

他の興味をそそる可能性のある問題が一つあります。それは、千年期に**「無数の御使いたち」**（ヘブル12章22節）がいるのです。そして、これらの天使は仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるために遣わされている（ヘブル1章14節）のです。この関係は恐らく永遠に続くでしょう。なぜなら、新しい地球で変更されるとの暗示は聖書のどこにもないのですから。

これら天使たちの多くは、サタンに従って創造主に反逆していたのです。これらの天使はみな永遠の火に引き渡されるのです（マタイ25章41節）。けれども、彼らの職務に忠実にとどまり、なおキリストのみ旨に服従する天使たちは、おそらく、「キリストと共に治める」人々の指示の下にもあるのです。このことは、おそらく、**「私たちは天使をもさばくべき者だ、ということを、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか」**（Ⅰコリント6章3節）に隠されている言外の意味です。

ゴグとマゴグ

聖書すべての中で見出される堕落した人の性質に関する解説の一つがこの文節の正にここにあるのです。人にとって完璧な生活環境である千年を過ごした後でさえ、機会さえあれば、躊躇なく主に反逆しようと待ち構えているイエス・キリストをいまだに主と受け入れていない多くの人々が地上に居るのです。千年期の完璧な生活環境とは、豊富な物的貯蔵品とすべての人に対する霊的教育によって、犯罪も、戦争も、外から来る罪の誘惑もなく、甦ったすべての聖徒の個人的存在とキリストの臨在、さらにサタンとそのすべての使いが底知れぬところに縛られている完璧な環境なのです。

黙示録20章7節　しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、

サタンは牢から逃げられないことに注目してください。主イエス・キリストは、ご自身の所有である天と地の全権を保持して宇宙の御座におります。たとえ聖徒たちがキリストと共に治めているとはいえ、彼らが行使しているのはキリストの権威に在ってであり、サタンはどうしようもない誰一人助ける者もなく牢にしっかりと捕らえられているのです。

ダビデ王は、たとえ復活した身体で、イスラエルへの当面の支配権を割り当てられたとしても、ダビデの子、イエス・キリストは、実際に、シオンにあるダビデの御座から全世界を治め、それから永遠に（イザヤ9章7節；ルカ1章31～33節；黙示録11章15節；イザヤ2章2～4節）治めるのです。キリストは、完全に支配し、鉄の杖を持って（詩篇2章6～9節）全ての民族を治めます。

それなのに、黙示録20章3節によると、サタンはしばなのらく解き放たれなくてはなりません。すばらしい至福千年期の間、人が犯すどんな犯罪も明白な邪悪さも厳蜜に抑えられています。このような極悪な罪人が悔い改める十分な時間が与えられているにも拘らず、彼らは百歳になるまで罪を悔い改めないなら死刑に処せられるようです（イザヤ65章20節）。

さらに、すべての人に創造主、贖い主、王としての主イエス・キリストに関する真理はあらゆる面で十分に示されています。彼らの個人的王・祭司として栄化された聖徒に直接会うことができるように、彼らが希望すれば、イエス・キリストにも個人的に会うことができるのです。彼らは罪からの救いには身代わりの犠

牲が必要なことをよく教えられているのです。そのために各々の国民は定期的に動物の犠牲を記念に捧げる為エルサレムに使節を送らなければならないのです。こうして彼らは、彼らの偉大な王が、ずっと昔、肉体をもってエルサレムにお生まれになったことと、彼らの魂を救う為にカルバリーの十字架上で死ぬために（ペテロ2章24節）お生まれになったことを覚え続けるのです。

このようなありとあらゆる恩恵を与えられ、キリストの名を信じキリストを愛し仕える為に必要なありとあらゆる刺激があるのに、それでも、心でキリストを拒否する人がなお大勢いるのです。これらの人々は、もちろん、最初に千年期に入った人々ではなく、彼らに次ぐ数世代後に生まれた人々から出て来ます。大体、これらの人々は表立って罪や反逆行為をすることは避けますが、多く人がこのような行為を止めているのは、恐怖のためで、愛のためではありません。

このような理想的な環境に生まれ育てられた人々にとって、彼らがそれまで知ったすべては、平和、繁栄、正義であり、彼らの両親や彼らの天にいる支配者や先生たちによって彼らに告げられた以前の時代に関する物語は、何世紀も過ぎ去るにつれて空想的で奇抜な出来事と思われるようになります。そして、若い世代の多くの人々は彼らが制約の下に生きなくてはならないことをひそかに不快に思い始めます。たとえサタンが縛られていて、創造主を疑ったり創造主の御心に従わないようにと働き掛ける誘惑がなくても、彼らは、エデンの園におけるアダムとエバのように罪がないわけではありません。彼らの心は、生まれながらにして、遺伝的継承によってただ単に、**「よろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」**（エレミヤ17章9節口語訳）のです。そして、彼らの祖先が救われたように、もし彼らが救われるなら、彼らは救い主としてキリストを受け入れなくてはなりません。あからさまな罪とほとんど接することがなく、また必要な物質は

いつでも容易に入手できる状態で、罪の自覚は彼らの先祖にとって困難であった以上に彼らにとってはより困難でさえあるのです。

悪魔と恐らくその配下の軍勢総てが、ひと時解き放たれなくてはならないのは明らかにこのような理由によるのです。これら千年期の世代の人々すべて、即ち、千年期に生まれ育ったすべての人々は、各自はっきりと選択しなくてはならないのです。彼らはエルサレムにいる彼らの偉大な救い主である王により頼むか、それとも、終わりに当たって彼らに選択の機会が与えられた時、彼らの生き方として罪を、彼らの神としてサタンを選ぶのでしょうか。

これが人類最後の最も大きいテストになります。以前の時代には、キリストを拒否している言い訳として、人々は環境問題を、すなわち、貧困、ポルノグラフィー、戦争、知的強制力や病気などを、用いました。けれども、ほぼ千年にわたってこれら総てが禁じられていたので、もはや彼ら自身の罪深い心としか言いようがなく、これらは暴露されなくてはなりません。

黙示録20章8節　地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。

サタンは、常に大いなる詐欺師で、千年も底知れぬ穴に閉じ込められていてさえ、その性格も目標も少しも変わりません。サタンは、完全に打ち負かされた後でさえ、もう一度、創造主を滅ぼす働きに着手します。そして、人の連合軍を召集するために昔ながらの欺きの古い戦略を用います。人の数は歴史上最高の数になっ

ているのですから、今度の彼の見込みは、彼らがかつて目論んだのより事実上遥かに際立ったものとなっています。長寿と完全な環境の続いた千年期の結果、人は遂に「地を満た」し、人口は、海の砂のように実際に数え切れないほどになっています。

しかし、年を経た悪魔でさえ彼の成功に驚くかもしれません。サタンは数千年にわたって知っていたほど多くの諸国の民を見出します。しかし、サタンが今まで経験したより遥かに欺きの機が熟していたのです。例えば、諸国のうちの幾つかは、仮庵の祭りにエルサレムに行く義務を軽んじ始め、そして、彼らの国の土地はひどい旱魃で罰せられていた。エジプトは災害さえ経験していたのです（ゼカリヤ14章16～19節）。

サタンが地の王たちにもう一度特使を派遣した時、サタンは彼のすみやかで広範な成功を大いに喜びます（黙示録16章13～16節）。確かに、悪魔的大波が国々で王として祭司として奉仕している甦った聖徒たちによって抵抗を受けますが、彼らでさえ義の束縛から逃れようと機会を切望している世界の大衆の大規模な離反の流れをせき止めることはできません。年を経た蛇（サタン）のごまかしで致命的な使命をもう一度成し遂げ、騙され易い大衆は、彼らの父祖の進化論信仰にまもなく復帰し、創造主が人の創造者であり救い主である明白な証拠すべてを拒絶し、彼らはむしろ宇宙自体が永遠の実体であり、其の永遠の実体から創造主もサタンも現れ出たとの立場を選ぶようになります。

悪霊憑きの軍隊を指揮する人を必要としていて、サタンは最も感受性の強い精神を持ち、古代から創造主の敵の仲間であった働き手ゴグとマゴクを見出します。もちろん、バビロンは千年期の直前に完全に滅ぼされていましたが、大きな北方にあるマゴグ王国は他の国々と同様に再び強くなり繁栄していました。そして、もう一度創造主に敵対するに当たり国々を指揮する準備ができていました。

ノアの孫でヤペテの次男であったマゴグは、スキタイ最後にはロシアとして知られるようになった黒海とカスピ海の北にある大きな王国を創設した。彼の名は古代のグルジヤ国にかすかに残っているように思われます。同様に、これら北方地域に移住したマゴグの兄弟、メシェクとトバルは、おそらくモスクワ（モスコウ節）とトボルスクの名になおわずかに認められます。

聖書には、エゼキエル38章、39章を除いてこれらの人々の歴史についての記載はほとんどなく、考古学から光はまだほとんど与えられていません。しかし、知られているすべては、後の日の大ロシア帝国の祖先になる人々の複雑さを指摘しているのです。ゴグとマゴクによるイスラエル侵攻を記した鍵になる二つの章と彼らの大激変による滅亡はすでに黙示録6章で検討しました。

人目を惹く名ゴグとマゴクについて聖書の中で、もう一度この時点で出てくるので、多くの注解者がエゼキエル38と39章に述べられている同じ出来事として黙示録20章のこの部分を解釈しているのは驚くにあたりません。けれど、二つの節には実質的に、名前以外に共通するものはありません。エゼキエル書では、イスラエルを攻撃する軍隊は、イスラエルを取り巻いているいくつかの特に名を上げられている国々から来、黙示録では、彼らは地上のあらゆる地域から来るとあります。エゼキエル書では、彼らは大地震と火山噴火で、黙示録では、創造主による天からの火によって彼らは滅ぼされるとあります。エゼキエル書では、滅亡に続いて七ヶ月の埋葬と七年にわたる武器のたき火が続いてきます。黙示録では、地球の更新と最後の審判が続きます。

エゼキエル38章，39章にある出来事は患難期のほぼ初めに起こるので、黙示録20章に書かれているゴグとマゴクの戦いより千年前に起こったに違いないと考える理由は既に記した通りである。たとえ偉大な

ゴグ人の指揮者と共にマゴグ人（又はロシア人）の大部分が、イスラエルの地に彼らの軍隊と共に埋葬されたとしても、患難期前には、他の諸国と同様に、そこには、創造主を敬う残りの民が残されていました。

しかし、これらの子孫は、急速に増え広がりました。したがって、ロシアはまもなくまたもや千年期の偉大な国民となりました。ことによると、マゴグという祖先の名を再び採用しさえするかも知れません。何世代も経つと若者たちは、彼らの祖先の破滅の歴史に胸が痛み、特にイスラエルに対して腹を立てています。それは、ゴグの帝国が滅ぼされたのはイスラエルにおいてであったことと、イスラエル人がいまや諸国の中で主な地位を占めていることによるのです。他の国々の軍隊が、その後イスラエルの地ハルマゲドンでほろぼされていたので、今や彼らの子孫も同じ恨みを共有し始めた。

しかし、新しいマゴグ人と彼らの新しいゴグは、反逆するための最も素晴らしい準備なのです。それゆえ、サタンとその配下の悪霊たちは、主に敵対する最後の軍隊を組織し導くために彼らを用います。

黙示録２０章９節　彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。

この記述はこの最後の反逆でついやされる時間がどれくらいかは語っていません。ただそれは千年期の後に始まります。少なくとも、記録では、すべての進行の度合いが実にすばやく起こることを示唆しています。サタンが解き放たれるやいなや、サタンの騙しごとは、世界中の不従順な心の持ち主に実にすばやく広まり、受け入れられます。恐らく悪霊に憑かれた男女の組織を通してサタンがしようとする時、ゴグとマゴグはす

べてのところに彼らの手先を遣わします。千年期の間戦争の武器の所持は許可されていなかった(ミカ4章3節)、しかし、前例のない科学的工業技術の進歩の時となるのは確かです。従って、ひとたび、状況が許せば、反逆者を欺くために時間はかからないのかも知れません。この手段によって彼らはキリストがダビデと使徒たちと共に治めている、愛された大いなる都エルサレムを速やかに征服できると考えます。

大群衆で、彼らは、エルサレムだけでなく「使徒たちの陣営」をも取り囲み、あらゆる方向から群がり攻めかかります。「陣営」ということばは、「城」または「軍隊」とも訳せて、戦争の防御のため設立した建物または組織に対する言及です。これらの「聖徒たち」は、キリストと共に地を治めるために天から下ってきた聖徒と同じです。人類の反逆の広がりが地球的規模に達した時、明らかに、贖われ、治めている聖徒たちは、偉大な王の愛された都で彼らの主に加わります。たぶん、イスラエルの民はこの時彼らのメシヤに依然として忠実に留まります。他の国々からの創造主を敬う残りの民も恐らく一緒に留まります。主に忠実なすべては、彼らが肉体にあろうと、甦った聖徒または聖なる天使であろうと皆がエルサレムに、またはその近郊に集まります。あらゆる方角から彼らを取り囲んで数キロメートル、恐らく彼らの上空にはヘリコプター・航空機などさえ配置され、この世の君である悪魔によってそそのかされ活気づけられたゴグとマゴグの数え切れない大衆が、キリストと聖徒に最後の激しい攻撃を用意します。

そして今、遂に、恵みと忍耐と哀れみの時代の後、創造主の忍耐の緒も切れます。人類が、あらゆる物質的祝福とキリスト御自身の個人的存在さえあって、ほとんど完全な世界が千年続いた後でさえ、創造主に対し実に速やかに反逆する時、主が出来ることは救い主としてキリストを受け入れるよう人に勇気づけ、引き寄せる以外に何もありません。もっとも偉大な創造主の愛をさえ拒絶し、その代わりにサタンに従うことを

選んでいる大衆に、創造主は遂に結末をつけられます。

突然、天そのものが燃えていると思われます。**「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は、わらとなる。来ようとしているその日は、彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。――万軍の【主】は仰せられる――」**（マラキ4章1節）天から下ってくる火の輪は聖なる都と大勢の聖徒たちを取り囲み、それから、すべての新生していない最後の一人が呑み込まれるまで外に向かってあらゆる方向に放射状に広がって行き、天から降りてくる火と波を打って押し寄せて来る焔によって焼き殺されます。

身体から遊離した彼らの魂は、サタンの怒り狂った悪霊と短い合間に混ざり合います。サタンの創造主を御座から引き降ろす最後の努力は、まったくみじめな失敗で終わります。穴から彼らが解放されて、地上にいる大衆を容易に誘惑しそそのかした後でさえ、これらの暗闇の権威と力は、偉大なる王の面前で、混乱し力のない状態にあるのをこの時も見出します。

恐らく、人と悪霊からなるこれらの失われたすべての霊は、彼らに永遠に覆いかぶさるように思われる恐ろしい運命から彼らすべてを解放できる何か極悪非道な悪賢いすばらしい一撃を求めて、絶望的な思いを持って彼らの主人サタンを見ます。彼らは、偉大なる詐欺師の働きを自らかってでた間抜けに過ぎなかったことを、そして、今度は自分自身を騙していたことを間もなく理解するでしょう。

黙示録20章10節　そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

ここは、原初の天使の決定的最後、すべての天使の最高位の天使、創造主の御座の上に自分を高く上げようとした不従順な**「暁の子**（イザヤ14章12節）**」**。の限定的な終わりす。大法螺吹き、偶像、偽りの神、創造主の休息を壊す者、父に敵対する反逆者、初めからの殺人者、盗人、姦通者、偽りの父、宗教的礼拝をむやみに欲しがる者、聖なる寛大な創造主の実に正反対の存在、悪魔は、ついに外の暗闇に永遠に投げ込まれます。

偉大なペテン師はいなくなった！　彼は全世界を惑わしてきた。アダムとエバで始まって、黄泉に閉じ込められた千年後でさえ、千年期の莫大な人の集団をなお騙すことができたのです。サタンは宇宙的規模で反逆して彼に従うように数え切れない天使たちの三分の一を騙してしまったのです。しかし、今やサタンはいなくなった。

そして、たとえ彼が以前には決してそれを明確に理解できなかったとしても、彼は確かに火の池に向かって突き進んでいることをはっきり理解し、とりわけ最初に自分自身を騙していたことを自覚しなければなりません。創造主は実際に、永遠にして全能の創造者であるとご自身で言われた通りの方でした。結局、宇宙は究極的実在ではなかったのです。すなわち、創造主はキリストに在って、宇宙空間、時間、すべての物質を創造されたのであって、それゆえ、キリストは現在も過去も永遠に王です。

サタンの最大の共犯者である二人は、すでに千年の間火の池にあって苦悩していました。サタン自身が燃えさかる池に投げ込まれる時、サタンは確かに彼らを其処で見るのです。地獄は苦痛の種（悩ますもの）で、絶滅ではない。地獄はこれらの悪人たちが、いたところではなく、千年後もいるところです。彼らの身体と魂は地獄で滅ばされてしまったが、彼らは其処になおいます。そしてサタンもその天使たちも、また、すべ

ての時代、洪水前も千年期の人々で救われなかった人々もすべて火の池で永遠に苦悩し続けるのです（黙示録14章11節）。

大いなる裁きの日

黙示録20章11節　また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

さて、びっくり仰天しているヨハネの前に、彼が今まで見たことさえないすばらしい一つの光景が展開されます。事実、その光景は目をくらませるような栄光に富んだもので、まさに地球そのものが跡形もなく消え去ります。

ゴグとマゴクに従った群衆を焼き尽くすために天から降った火は、ありとあらゆる栄光の輝きの中に住まわれる創造主の言い表せない真の姿を示す栄光であり、純粋にして透明な活力そのものです。今や、あの同じ宇宙の力が地球と大気圏の原子構造そのものを貫通し、巨大な火により人畜をはじめすべてのものを滅ぼし去り、天地は消え去り、現在の地球を終わらせます。

これは使徒ペテロが語ったすべてを焼き尽くす大激変の火です。**「しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。・・・しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、**

天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。そのようにして、創造主の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」（＝ペテロ3章7～12節）**「新改訳」**

まさに諸元素は（ギリシャ語で“stoicheion”物質の基本的構成要素に適切に言及した言葉で、まさに「地のちり」で、そこからすべての物は初めに創られた）、溶解します。（溶解ギリシャ語“luo”は元素そのものに関して3章10節に「焼きつくされる」と訳していますが、3章11節で「これらのものすべて」に関して「くずれ落ちる（溶解する）」、3章12節には「天は燃えてくずれ」に関して、天の万象は焼け熔けてしまいます。と訳しています。）（＝ペテロ3章10～12節）

地の諸元素は、創造主のみこころによる激しい熱で焼きつくされ、地上での人の業すべても焼き尽くされます（ギリシャ語“katakaio”は、「完全に焼け尽くされる」です）。地に関する創造主の長年の大いなる呪い（創世記3章17節）の影響は、地球が永遠の目的のために新たにされる前に、すべての元素から追放されなければなりません。大いなる化石の地層と罪と死の長年の支配によるその他の証明書はみな燃え尽くされなくてはなりません。

同様に空（大気）は逃げ去ります。なぜなら天（大気）の構成は地球と分けることが出来ないほどに地の構成と絡み合っています。これはイエスがマタイ24章35節「この天地は滅び去ります」で用いられているのと同じことばです。黙示録21章11節ではもっと写実的な用語さえ用いられています。「地も天も・・・

逃げ去った」。あたかも罪で呪われた地球が栄光に満ちた聖なる火の雲の進展の前にひるむかのように逃げ去ります。そして、光と大音響と激しい熱を伴った大爆発で消え去ります。

けれども、これが地球と大気の実際の絶滅として理解されるべきではありません。質量エネルギー保存の原理に準拠して、創造主の完全な被造物で、創造主の奇跡的働きによる以外、無に帰せられるものは決して何もありません（ヘブル1章3節、コロサイ1章17節）。この現象は、地球を構成していた質量（物質）がエネルギー（熱、音響、光）に変換される質量エネルギー変換の一つと言っても良いでしょう。この同じエネルギーは、罪と呪いに汚染された結果が清められて新しくされた地球の物質に再変換するのに用いられることでしょう。一方、地球の固形物と液体は強烈な熱で解離し（関係を絶ち）気化されるのは容易なのかもしれません。

どのような状況にあろうとも、固形地球とその大気は消え去り、それらの構成要素とエネルギーは宇宙空間に撒き散らされ、宇宙空間でこれらがあった場所は何もないからの状態になります。しかし同時に、ヨハネはこれらが消え去った理由を理解します。恐ろしい火は単なる前ぶれに過ぎず、宇宙の偉大な創造主に向かって進んだ聖なるエネルギーの広がりは、大いなる裁きの座に昇っていきました。

黙示録4章3節と比較して判るように、この御座の上に虹はありません。虹は裁きの最中にも創造主の恵みがあることを物語っています。黙示録5章6節と比較して判るように、御座には小羊のしるしはありません。小羊はかつて人の罪のために身代わりに殺された方です。そこには人の姿は識別され得ないし、受肉した人の子の姿もありません。それはむしろ威厳ある存在、三位一体の創造主、宇宙の創造者であり王であり裁判官である方、すなわち、**「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ」**（Ⅰテモテ6章16節）る方です。

聖徒の陣営と愛された都エルサレムの住民はゴグ・マゴクの人々を滅ぼした大火からも確かに守られていました、しかし同時に地球自体は燃え尽きてしまいました。彼らに関しては新しいエルサレムが新しい地球に下ってくるまでそれ以上何も語られていません。その時から、創造主に付く人々はすべて天の都にいるのですから、地球が消滅する前に、おそらくもうひとつの大いなる携挙が起こるのが確かと思われます。主に忠実にとどまり、キリストを信じる信仰の真実さを実際に証明している人々は、「空中で主に会うため携えあげられ」て、新しいエルサレムに移されるに違いありません。千年期の前に最初の携挙にすでに与かっていた聖徒たちは天の都の祝福を共有していますが、今や新しい一群の住人が加わります。そして彼らは千年期から出てきたのです。

けれども、聖なる都の祝福が説明される前に、大いなる白い御座での悲惨な出来事がヨハネに明らかにされなくてはならないし、われわれ自身への訓戒も数え上げられなくてはなりません。なぜなら、われわれと同世代の多くの人々が御座に集められるのですから。

黙示録20章12節　また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。

これからのいくつかの節で「死んだ人々」と言うことばは、魂よりむしろ肉体に言及するものです。もちろん、魂は肉体の死後、それから後のすべての時代を通して黄泉に意識を持って生き続けています。

前に記したように、「復活」と言うことばも身体にだけ当てはまります。**「キリストにあって死んだ」**（Ⅰテサロニケ4章16節）人々は、千年期の前にすべて死から甦っていましたが、**「そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。」**（黙示録20章5節）。前者は第一の復活であり、これは第二の復活です。これら第二の復活の向こう側に第二の死（黙示録20章6、14節）が広く行われるのです。

期待に反して、恐ろしい一時、彼らは、裁きのため創造主の前に立たなければなりません。これがキリストによって語られた**「裁きを受けるための甦り」（ヨハネ5章29節）**なのです。事実、「裁きを受ける」はギリシャ語“ krisis ”の翻訳です。クリシスは通常「裁き」（たとえばヨハネ5章30節で「わたしの裁きは正しいのです」を見よ）と適切に訳されています。こういうわけで、ヨハネ5章29節は第一の復活はいのちへの甦りであり、第二は裁きへの甦りです。救いに到る信仰をキリストに対し持っている人々は、大いなる白い御座に裁きのために現れることは少なくともあり得ません。**「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」**（ヨハネ5章24節）。

創造主は天にいくつかの書を持っています。したがって、今まで生を受けたどのような人々の行為やことばも失われることがありません。これらの書は、ヨハネの時代に用いられていた巻物または、今日のように綴じられた書物か、わたしたちが知らない他の形態の書物かもしれません。おそらくそれらの書は今日のビデオテープに似たものから出来ているでしょう。もし、人が光景と音響を保存するエレクトロニックスを用いることが出来るなら、最初に電磁エネルギーのすべての形態を創造された創造主が、確かにそれらを用いることが出来、もっと遥かに効果的に用いられるのに何の疑問もありません。

救われない人々は、秘かに行った不敬虔なことばや行為の確かな事実に安らぎを得ることはありません。**「隠されているもので、あらわにならないものはなく、秘密にされているもので、ついには知られ、明るみに出されないものはない。」**（ルカ8章17節口語）のです。明らかに、各個人のこれらの働きすべての記録は、創造主に知られるだけでなくすべての人に見せられます。創造主はもちろんご自身で記録の書を必要としません。なぜなら、創造主は全知です。そのため、これらの本は主として創造主が創られたすべてのものに証するためであることは明らかです。

また、他に一冊の書物があり、それは行い（わざ）の記録の書ではなく、いのちの書です。この書物には、かつて妊娠したすべての子供の名が一度は書き込まれていました。それゆえ、彼らは創造主によって「いのち」を与えられていたのです。しかしながら、悲しいことに多くの人々は（彼らがイエス・キリストを通して彼らを救う創造主の対策を死に至るまで拒否したことが明らかになった時）、彼らの名が**「いのちの書から消し去られて」**（黙示録3章5節・出エジプト32章33節・詩篇69章28節）しまったのです。復活した死者が輝く御座に居られる荘厳な陛下（主の尊称）の前に立つ時、この書がまた開かれます。

それから、次から次へと一人ひとり、自分の生涯の再吟味のために、創造主の前に立つ時、判決が言い渡されます。もし一人におのおの一時間かかり、裁かれる人が450億人と仮定すると、法廷の状況はおそらく五百万年続くでしょう。しかし、これは永遠の尺度から見て無に等しいのです。この裁きは行いに基づいてなされるはずです。そこで、すべての人の行いは再吟味され、すなはち、犯罪の動機と機会に照らして公平に再吟味されなくてはなりません。**「主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、**

打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」（ルカ12章47、48節）。各々の場合、創造主の刑罰は、完全な正義に適うように注意深く執り行われます。

黙示録20章13節　海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。

死が訪れると、身体は腐り塵に帰ります。しかし、多くの民族では、亡骸は、まずある種の墓に埋められます。特に、イスラエルでは本当です。その結果として、「死」と「墓」と言うことばは聖書で本質的に同義語としてしばしば用いられています。コリント第一の手紙15章55節の「死（death）よ、お前のとげは、どこにあるのか、死（grave）よ、お前の勝利はどこにあるのか」とあるように。

身体が死ぬと、魂は黄泉に降ります。（地獄に対する用語はここでは黄泉です。黙示録1章18節の検討を見よ）。多くの場合、死は肉体を地面にある墓に収めるように要求します。しかし、多くのものは海で溺れています。したがって、彼らの身体は決して土の中にはないのです。また、多くのものの身体は火葬にされ灰は巻散らされます。しかしそれらが何処にあろうと、創造主は、恐らくすべての原子を、彼らが死んだ時と同じ状態に、そのあるべき所に呼び出すことが出来ます。いくつかの身体は陸地と海から出てきます。そして、身体が来ると、大いなる黄泉の穴が閉じ込められていた魂すべてを吐き出します。そして、彼らの以前の身体に再び入ることが出来るのです。

海に関する言及が最初にある理由の一つは、恐らく数え切れないほど多くの人がずっと昔ノアの大洪水の

時、水の中で溺れ死んでいたからです（創世記6章17節）。ノアの洪水は最初の世界を滅ぼしました（Ⅱペテロ3章6節）。今や、火が第二の世界を滅ぼしました（Ⅱペテロ3章10節）。その各々の場合多くの罪びとを殺しています。物理的地球の破滅後、地球はすぐに融解してしまっていたので、最後の大火で滅ぼされた人々の魂は、本当の黄泉に決して到達できない可能性があります。なぜなら彼らが滅亡してすぐ後地球は溶解し、消え去るからです。この可能性は、大虐殺のすぐ後12節の「死んだ人々」に関して記して暗示されています。こうして、最初は火で死んだ人々、次いでノアの洪水で死んだ人々の言及があり、それから、大火が黄泉の壁を融解する時、最後に黄泉がなくなるので墓に埋められたすべての失われた魂が出て来る順序の言及かもしれません。

とにかく、有史以来、すべての時代のすべての民族、富者か貧者か、力ある者か取るに足りない者か、教育ある者か無学の者か、総ての者は肉にある古い身体に甦り、裁きのため創造主の前に立つのです。しかし、この復活はいのちへの甦りである第一の復活のようなものではありません。すなわち、その身体は、第一の復活に与かる聖徒の身体のように不死ではなく、同じ古い死ぬべき身体で、痛みや死にさらされているのです。パウロは、「死は勝利に飲まれた」と言います。それは、**「死ぬものが不死を着るとき」で、創造主は「私たちの主イエスによって、私たちに勝利を与えてくださいました」**（Ⅰコリント15章54、57節）。明らかに、イエス・キリストに従うことを拒否した人々は、キリストの勝利の分け前に預かれないのです。

痛みと恐れで震えおののく肉体でそこにいるすべての人は、全被造物に見せられる自分が肉体にあった時に行った総ての行為を自分で見守らなくてはなりません。そのため、自分もその他の人も彼に下された有罪の決定は正しいと最終的に認めなくてはなりません。幾人かの人は、彼らの悪い行為が再現された時、良い

行為、多くの宗教的活動もしていると言って抗議するかも知れません。**「その日には、大勢の者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」**（マタイによる福音書7章22、23節）と。

彼らが、創造主の恵みとキリストを個人的に信じる信仰を通して与えられる罪の許しと救いに関する申し出を拒否し、その代わりに救いの代価として彼ら自身の賞賛に値する行為を選んでいるので、創造主は、彼らの行為によって彼らをほんとうに裁くのです。しかし、創造主が私たちを救うのは、「私たちが行なった義のわざによってではない」のです。義の尺度はキリスト御自身なので、**「すべての人は、罪を犯したため、創造主の栄光を受けられなくなっており」**（テトス3章5節；ロマ3章23節）ます。誰一人創造主の基準に達する人はなく、それゆえ、「彼らは皆彼ら自身の行為によって罪に定められるのです。」

黙示録20章14節　それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

行為による裁きの結果は、有罪の判決がなされるだけなのです。したがって「死と黄泉」です。すなはち、第二の復活までに死んでいた身体と黄泉に閉じ込められていた魂からなる誰もみな、火の池に投げ込まれます。彼らはそこにサタンとその使いたちと共に永遠に留まります（マタイ25章41節）。そこには獣と偽りの預言者たちも居り、彼らは千年以上前に裁かれ罪に定められていたのです（黙示録19章20；20章10節）。

火の池の正確な特徴や位置は聖書に記されていませんが、その火が物理的実体を備えていることを疑う理由はありません。地獄の火についてだけで新約聖書に20回以上の言及があり、それらの最も多くは、主イエスご自身が語られたことで、その文脈からそれらの火が何らかの比喩的な火であることを示唆しているところはありません。事実、もしそれらの箇所が他の何かの象徴であるなら、なぜ、それらの説明が何処にもなされていないのでしょうか。そのように緊急な警告が与えられていることから、疑いの余地なくそれらの箇所を真摯に受け取るべきです。どんなに少なく見積もっても、現実はそれがなんであれ、実際の火となんら変わることのない恐ろしく苦しいものであると結論付けなくてはいけません。それによって、これが実際の火と考えるのは大げさだと軽く考えることの無いようにすべきです。

この最後の永遠に続く火の地獄のおかれてある所は、もちろん現在のこの地球には有り得ないのです。なぜなら、現在の地球は焼き尽くされるのですから（＝ペテロ3章10節）。それが新しい地球にあるとはまったくありそうにないと思われます。なぜなら、**「正義の住む」**（＝ペテロ3章13節）地球のはずですから。そして、何十億人もの悔い改めない罪びとの肉体に永遠に苦痛を与え続ける燃えさかる大釜（がま）は、どうやらこのような地球の何処にも調和しないのは確かなようです。さらに、火の池は、獣と偽りの預言者を受け入れる為に千年期の前にすでに実在しており、なお火の池は千年期の終わりに地球が気化した際も明らかに切り抜けて後まで残っていたのです。

火の燃える池が、新しい地球とその聖なる都から限りなく離れた所に移されて宇宙の遥かかなたの片隅に位置している可能性を聖書は示唆しています。イエスは背教の「御国の子ら」について語った。彼らは最終的に**「外の暗闇に投げ出され泣いて歯軋りする」**（マタイ8章12節）と。イエスは婚姻の席への礼服を着ない侵

入者にも同じ用語を用いました。「そこで、王はしもべたちに、『**あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。』と言った。**」（マタイ22章13節）。「**悪いなまけ者のしもべ**」（マタイ25章26～30節）にも同じ判決が割り当てられました。

ユダ書にも偽りの教師は「**・・・さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されています。**」（ユダ13節）と言われています。ペテロもこのような人々について「**この人たちは、水のない泉、突風に吹き払われる霧です。彼らに用意されているものは、まっ暗なやみです。**」（＝ペテロ2章17節）と言っています。これら二つの表現（「まっ黒なやみ」と「霧」）は同じギリシャ語の訳で、ともに、光線の通らない雲の概念を表しています。繰り返しことばがペテロ第二の手紙2章4節とユダの手紙6節に「くら闇」と訳されており、共に裁きを待っている堕天使を縛っている鎖について語っています。何らかの点で、この「外のくら闇」は主イエスも救われないものが究極的に入ると示唆している「永遠の火」に相当するに違いないのです（マタイ25章41節）。

使徒パウロもこれらすべてについて「**創造主を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々・・・そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。**」（＝テサロニケ1章8、9節）と語っています。ここの用語「滅び」は「霊魂の消滅」を意味しないで、むしろ肉体の死（Ⅰコリント5章5節を比較せよ）または「滅び」の意味での「死」を言外に示しているのです。「から（ギリシャ語“apo”）」と言うことばは重要で、それは強い「引き離された」との意味を伝えているのです。すなわち、創造主を敬わない者は、創造主の栄光に富む力が特に現されている創造主のご臨在のところからはるか遠くに離れたどこかで永遠の滅びの状態に追いやられるのです。創造主の栄光の御座は新しいエルサレムに位置し

ているのですから（黙示録21章23節）、結論は、救われなかった者は、そこから出来るだけ遠く離れた所に移さなければならないということです。

これら仕様書のすべては、「地獄」（ギリシャ語“gehenna”）または、「火の池」は、（現時点では定かではないが）遠く離れたある星に位置している可能性があると指摘しているように思われます。結局、一つの星がまさに火の池なのです。「燃えている」けれども、目に見える電磁波（スペクトル・光）を実際に出さない、星々や銀河があり，したがって、それらの星は「火」と「曇った暗黒」からなっています。このような星が実際に存在することが証明されるなら、ある人は「ブラックホール」がこの記述に合うと示唆するかも知れません。

どこに火の池があろうとも、なお、復活した身体が永遠に自然界にある現実の火の大釜で永遠に燃え続けることが有り得るかどうかに関する問題があります。もちろん、その火が、即刻これらの身体を焼き尽くし、したがって、彼らは実際に第一の死と同じように肉体の第二の死を通過することが可能です。そして、彼らの肉体から離脱した魂が火の池にて永遠に苦しみ続けるのです。魂々が猛火の環境で実際に何らかの方法で実際に苦しむことは、キリストが話された金持ちの証に簡単に述べられています。「**その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、・・・彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』**」（ルカ16章23，24節）。黄泉にある魂は（パラダイスにいる魂と同様に――Ⅱコリント5章1～4節を注意せよ）霊の身体を保ちます。霊の体は各々の地上での身体に似ています。肉体から離脱した魂でさえ彼らの地上での身体との一致によって認められるように思われます。イザヤ14章と共にエゼキエル

３１章，３２章にある黄泉（シェオール）における死者の顕著な記述に注意せよ。あの存在がそうで、このような霊の身体もまた霊の感覚を持っことが出来るのかもしれない、彼らが肉体にあるときに持っていたのと似た感覚を経験し続けることが出来るのかもしれません。明らかに、私たちはこのようなことをほとんど理解していません、そして肉体を持たない人が経験する痛みや喜びの度合いを測定する道具を持っていませんが、なお肉体と関連した霊と魂の一致を保ち続けるのです。私たちは、このようなことはあの結果に対するあれやこれやの聖書的暗示に基づいて真実であると推論できるだけです。

これはもう一つの可能性です。聖徒の復活した身体が永遠に生き続けるように、恐らく救われなかった人々の復活の身体が永遠に瀕死の状態にあるでしょう。すなわち、彼らの肉体は火で焼き尽くされることはなく、永遠に焼き尽くされつつある状態に留まるのです！

これは主イエス・キリストご自身が、この悲惨な警告を発している事実を除いて、ほとんど考えられないように思われます。マルコの福音書９章４３節から４８節に、主は、**「ゲヘナの消えぬ火の中に落ち込まれる。・・・そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることがありません。」**と恐ろしい危険の存在について語られました。

前文またその他の節で「地獄」と訳されているゲヘナは、エルサレム郊外のヒンノムの谷に関してその名が付けられています。古代にこの谷の中に市の廃物だけでなく犯罪者の死体も投げ込まれました。谷のおぞましい内容物は絶えず蛆に食べられているだけでなく、しばしば火が燃え上がっており、したがって、その谷は実際に、しばしば火の池の様相を呈していたのです。主イエスはただ単に、最後のゲヘナでは、ゲヘナの住人の身体は焼き尽きることのない身体であり、永遠に、死なないうじによって蝕まれ、消えることのない火で焼かれ続けると言っておられるようです。

このようなことがどうして可能になるのかは分かりません。しかし、主は、栄化された聖徒の復活した身体が完全な物理的身体（肉体節）なのに、**「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって」**（ピリピ３章２１節）もはや痛みも死もない身体になることを知っておられるのです。もし、主が前者にすることが出来るなら、創造主を敬わない栄化されない復活の体が永遠に痛みと死とを受け続けるように後者にも確かに出来るのです。この恐ろしい永遠の見通しが正しい理解であると判明されるなら、火の池を第二の死とするのが、明らかに妥当なのです。

これらの健全な警告すべての正確な意味が何であろうとも、失われた罪びととして死んだ人々が恐ろしい未来に直面するのは明らかです。もしこれらがすべてを単なる象徴とすべきなら、現実はなお悪いに違いありません。ユダが多くの者を**「恐れを感じながら、火の中からつまみ出して」**（ユダ２３節）救うべきだと主張しているのも驚くにあたりません。

黙示録２０章１５節　いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

失われた人々が彼らの行為の記録によってだけでなく、小羊のいのちの書に彼らの名がないことによっても有罪と判定されるのです。妊娠の時に各自の名がいのちの書に書き込まれるのに加えて、彼の「責任年齢」になる時、救い主としてキリストを受け入れた日時、そしてその回心が本物であったか否かを示す証拠が記録されると推測されます。しかし、もし、人が死ぬまでに最後の二つの項目が書き加えられていないなら、

すべての記録はいのちの書から消され（黙示録3章5節）、恐ろしい空白が彼の名のあったところに残されます。いのちの書にあるこの空白の場所が最終的結論の証拠であることを示して、裁かれる人は火の池に引き渡されなくてはなりません。

すでに指摘したように、天において報酬の程度に差があるように、地獄における裁きの程度にも違いがあります。燃える火と硫黄の池に投げ込まれる実に救われない似た者同士にもかかわらず、より邪悪なものが邪悪さのより少ないものよりもそこでさらに苦しむようにされる手段についてはまだ明らかにされてはいません。ルカ12章47節と48節にある「多くむち打たれる」と「打たれ方が少ない」が正確に何を意味しているか、また、イエスがマタイ11章20～24節で警告しているように、「裁きの日」にツロとシドンのほうがカペナウムとベッサイダより罰が軽いとは何かは、私たちには答えのない問題です。

ある意味で、邪悪さがそれ自身の苦しみを発生させます。聖書の最後のことばの中に、**「不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。」**（黙示録22章11節）ということばがあります。人々は彼ら自身と永遠に続く彼らの罪深い、永遠に報われない罪、肉欲と嫌悪を携えて生き続けなければならないのです。結局、それは、彼らがキリストの方がよいと思うことなのです。この破壊的悪は、確かに彼らをその罪の激しさに比例して苦しめます。

「第二の復活」で、創造主が彼らに割り当てた復活の身体は、個々人にふさわしい刑罰の程度に釣り合って各自の神経系統の感覚反応が変化していることでしょう。したがって、地獄の実際の痛みは一人ひとり違います。創造主は確かに、各自にあつらえられた完全な正しさで、刑罰を与えることが出来るのです。救われなかった人々は第二の死である恐ろしい火の池で意識をもって苦しみながら永遠を過ごすのです。

創造主を敬わない今日のこれらの人々は、このような考えをあざ笑います。そして、キリストを拒否する口実にさえそれを用います。彼らは「愛の創造主が地上での罪と反逆のわずかな年月の仕返しにこのように恐ろしい運命をどうして人に下せるのでしょうか。」と言います。

しかし彼らは、キリストが十字架上で死なれた時、創造主がこれら地獄の激しい苦痛すべてをご自分で彼らの身代わりに受けておられることを忘れています。事実、罪なき方が私達のために罪となられた時、地獄の実体である創造主との恐ろしい分離を無限大に受けられ、同じ分離で永遠に苦しむことから罪人を救い出すために罪となられたのです。創造主の書に彼らの罪の記録がどんなに大きく数え切れないほどあろうとも、世界の基礎が置かれたときから殺された小羊のいのちの書に彼らの名の記録があるだけで、火の池から彼らを救うのに、また主の居られる天で朽ちることのない資産を彼らが受けるのに十分すぎるくらいなのです（ペテロ1章3～5節）。創造主は彼らを愛し、キリストは、許しと永遠のいのちを与えるために彼らのために死なれたのです。

しかし、彼らはキリストをもキリストの愛をもご臨在をも望まなかった。彼らは創造主とキリストの御意志に関わりなく罪の中に生き続けることを好んだ。このような犯罪に釣り合う刑罰はありません。彼らに対する創造主の愛の御思いと救い主の彼らのために受けられた無限の苦しみを蔑む事は、創造主の御心と創造の目的そのものを打破することになります。この無限の罪は彼らの心に永久に続くのです。したがって、彼らの意思に反して彼らがはねつけ憎んだ方の面前で永遠に過ごすように強制されるなら、地獄での苦しみの方が実際に苦しみはより少ないのです。

最後に、これらの恐るべき警告に対する権威者は、黄泉と死の鍵を持っておられる方の他に誰もいないこ

とを私たちは思い起こすべきです（黙示録1章18節）。私たちは創造主の方法を完全に理解しているかいないかどちらにしても、キリストの明らかな教えを拒否するための言い訳にはなりません。キリストはすべてのものの創造主（コロサイ1章16節）であり、すべての人の裁き主（ヨハネ5章22節）であるだけでなく、死そのものをご自身で征服した唯一の方です。

キリストが永遠の火と外の暗闇と不滅の蛆について警告する時、キリストはありのままのことを私たちに告げていることを確心出来るのです。なおその上、黙示録でさえキリストの指示によって書かれており（黙示録1章1、11節）、キリスト御自身が救われない人を火の池・第二の死に送り込む裁判官です。今まで人が為し得た最も悲惨なばかげた誤りは、キリストの警告を無視し、キリストのことばを拒否することです。**「罪から来る報酬は死です。しかし、創造主の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」**（ロマ6章23節）